甲斐荘（かいのしょうただおと）楠音展を見て

内藤　真理子

彼は、大正から昭和初期にかけて活躍した日本画家である。

とは言っても、私は知らなかった。

「東京ステーションギャラリーで回顧展をやっているのだが、面白いですよ」

そう言って知人から招待券を頂いたので、早速行ってみた。

本当に面白かった。彼は革新的な日本画の作品を次々に発表して高い評価を受けていたそうだが、その後、映画業界に転身。そして演劇に通じた趣味人として、様々な芸術を越境する「複雑かつ多面的な個性を持った日本画家のみにとどまらない表現者」としての、甲斐荘楠音となるのだが、今回はその全貌にせまる回顧展だそうだ。

なんだか、複雑な説明だが、大正初期のころの作品から見はじめた。対象はほとんどが女性で斬新だ。女人像の女性の顔は、美しいが一癖も二癖もあるような怖い顔をしている。「横櫛」という題の絵は女性の立ち姿で、遊女だろうか、派手な柄の着物に打掛をだらりと纏った姿は、砕けているのに心の芯が一本通っているように見える。他の女性も躍動感があり、活き活きとしている。

説明によると、情念の深さや官能の豊かさが表現されているそうだ。

言われてみれば……。

「春宵（はなびら）」と題した花魁の絵があった。豊かな肢体と色気、それに灰汁（あく）のようなものがあり「花魁だからって舐めるんじゃないよ」というセリフまで表現されているようで、花魁であると納得した。もう一つ、「悪女菩薩」という作品があり、それは母親を現わしたものだとの説明があった。悪女＝母親？これも、わかったような、分からないような……。

彼はその後、映画や演劇の美しさにとりつかれ、彼自身が演劇の勉強をして舞台にも立つ。特に中年の男が美しい女の姿になる女形（おやま）への憧れか、女形に扮した写真も展示されていた。

又、沢山の映画の衣装も手掛けていて、旗本退屈男シリーズや、雨月物語、その他、誰でも知っているような映画で使われた衣装、それを着た、市川右太衛門等の俳優の写真なども展示されていて見所たっぷりの展覧会だった。